

体験で済ませたり、それで満足したりということが非常に多くなっている。現実よりも「情報」や「映像」のなかによりリアリティーを感じるというような倒錯も起こりかねない文化状況がある。たとえば、人間の生・死というものが現実の重みをもって感じられていなかったのではないか、との感想をもたせる少年事件も少なくない。

第6に、今日の大人社会で凶悪な犯罪、卑劣な犯罪が頻発しているという背景を見過ぎてはならない。今年4月名古屋市で起きた中学生による5000万円恐喝事件について、作家の宗田理氏が朝日新聞（4・21夕）で次のようにコメントしていたが、卓見だと思う。

「最近の少年犯罪は、大人たちの常識をはるかに超えているということで世間に大きな衝撃をあたえるけれど、しかしそういう犯罪は、大人の世界でも頻々と起きている。知事のセクハラ、保険金殺人、警察の不祥事。こんな事件は起きるはずがないという常識が次々とくつがえされる現在。子供の世界だけが聖域であるわけではない。」

子どもたちはいはば、大人の犯罪を「範」として「学んで」、犯罪や事件を起こしている面があるのではないか。

以上、「背景」や「要因」を列挙してみたが、いずれにしても、「こころの教育」の必要を唱えて済ませられる状況でないことは確かである。

特集 現在、 子ども・青年を考える

「ほっとできる」とき、「あったかい気持ち」になるとき

和光中学・高校 森 下 一 期

1. いま、私が接している子どもたち

私は校長なので、授業は高校2年生の選択科目を1つもっているだけです。従って、直接普通の学校の雰囲気や生徒と交わることができるのはこの場だけです。廊下や職員室でいろいろな生徒と無駄口をたたきませんが、それでも“校長”のかげがくっついていよう。それに対して、やはり授業は継続的なので、だんだん“校長”のかげが薄くなっていきます。ああ、教師なん

だな、と感じさせてくれる場です。今年は、授業のときに外に出張しなければならない時があるため、家庭科の先生に協力してもらって二人で運営している状態なので、余計に校長色が薄くなっています。

この授業は、「現代社会と技術」という選択科目です。これまでも何回か報告してきましたが、今年の大会の記念トークにお招きする岡谷の宮坂製糸さんを見学し続けてきています。なんと、今年10年目です。これ

は秋に行う研究旅行でのことですが、普段は、職業について考えるためにいろいろな人へのインタビューをしたり、それをまとめて互いに学びあったりしています。

この授業で、今年、私は感動といっても良いような経験をしました。先のような内容ですから、私が声を張り上げて講義をしたり、黒板にチョークをたたきつけて書くわけではありません。仕事のインタビュー集から各生徒が希望したものをコピーしてやってそれを読ませたり、その感想を書かせたりしているのです。もちろんときには空前の失業率の問題といった現代の労働問題を語ることもあるのですが、もっぱら生徒が読んだり、書いたり、友達と相談したりしているのです。

例年、こういった取り組みでも結構よく取り組んでいるのですが、中にマンガを読んだり、おしゃべりに熱中したりする生徒も何人かいたものです。ところが今年は、どうしたわけかみんながかなり集中して取り組むのです。おしゃべりが無いわけではありません。でも一時を過ぎるとみんなが無心に鉛筆を走らせ、芯の音しか聞こえないような状態になるのです。そんな授業の二コマで、ある生徒が「この授業はほっとするよね」と友達に語りかけているのです。

一つの授業に集まってきた生徒がそこを気を許した“学び”の場として、とらえてくれていることに言葉では表せない暖かさを感じました。

それは、わずか10名足らずだということもあるかもしれません。集まった生徒の構成によるのかもしれませんが、でも、出席してくる生徒たちはインタビューに行くとき

にはちゃんとアポイントメントを取っていますし、そのまとめを全員が期日までに書いてきます。これまでは何人か遅れるため、成績を出すにも気をもんだものです。

私がここで紹介したかったのは、今のごく普通の高校生の姿の一例なのです。問題状況があれこれ言われる中では特殊と見えるかも知れませんが、授業を何気なく選択してみたらこんな雰囲気になっていたということです。つまり、いま、こんな素敵な場があり得るということです。生徒はこういう場を求めているし、そして、彼ら自身ができるのです。

このわずか、10名足らずの生徒たちであっても、ペアとなっていたり、ペアができつつあったり、いろいろな人間関係が見られます。見ていてほほえましい気持ちになります。一緒にやっている先生との話題はこの授業での楽しさと、それぞれの生徒のリラックスした様子です。教師冥利につきるという言葉がありますが、今年はそのような気持ちにさせてもらっています。

2. でも、それは……？

ここまでを読むと、いわゆる“自己満足”を言っているだけではないか、と思われるかも知れません。でも、この授業にはもう一つの面が表れているのです。先に“出席している生徒は”と書きましたが、つまり、出席していない生徒がいるのです。一人は一度も授業に出ていません。学校にも今はきていません。今一人は、授業に2回ほどは出ましたが、それだけです。この生徒はある曜日は登校する割合が高いようですが、不登校気味です。

今一人、受講届けは私に直接出しにきたけれども、授業には一度も出ず、6月初旬に退学していきました。この生徒とは、1年生のときに2度ほど校長面接もしていました。1年生の2学期頃から急に学校に来なくなり、欠時数が規定時数をオーバーする寸前まで行きました。学習すること、学校に登校することに拒否反応を示し、地域の中学時代の友達と夜遅くまで過ごし、夜中、朝方家に帰るといった生活でした。それでも、3学期は進級を目指してかなりの意識的な努力をしていました。その努力を学年末の面接で確認しあったりもしました。ですから、私の授業で一緒になったらいろんな対話ができるかも知れないとある種の期待もしていたのです。でも、授業では一度も顔を合わせることなく去って行ってしまいました。

そういえば、昨年度もこの授業の受講者の一人が6月末に退学していきました。その2年前にもいました。

こんな小さな一つの選択授業にも不登校者、退学者がいるのです。

前項で述べた生徒たちとの対比で考えさせられます。こう述べるとそこに大きな差があるように見えますが、少しの条件の違いでどちらにもなり得るような感じもします。その条件とは、私が見聞きするところでは、親と子のすれ違いによるところが多いようです。

校長はこういった困難を抱えた生徒と接することができるのは最終段階です。不登校の場合、結局は生徒と顔を合わせることなく、終わってしまうこともあります。生徒と話ができても結論や結果が出てしまっ

た段階のことが多くなります。そこにはいろいろ考えるさせられるケースがあるのですが、今回は普通の生徒、困難を抱えている生徒がどのような場面でどう自分を出して行くかに着目することとしました。

3. 宮坂製糸場で

研究旅行では生徒は思わぬ感動に出くわします。これはTさんのまとめの一部です。

「だけど、やっぱり一番心に残ってるのって、宮坂製糸工場だった。この日は、いつもとかかわらずバスに乗っていった。だけど私を感動させる“わな”があったなんて知らなかった。何食わぬ顔をして、宮坂製糸工場に行って、そして先生が「くさい」とか口に出したらいけないって言ったり、いろいろあった。何か最初から、へんな雰囲気だった。宮坂さんの説明をうけて、工場をまわって、おばあちゃんが一生懸命に蚕の糸を紡いでいて、何かえらいなって思った。やっぱり普通の老人って何もやらないで家にいるとかが普通だったと思ったけど、その老人を見たとき、すごいナとか、大変そうなのにガンバッているとか、一生懸命さが伝わってきた。だけど、次々に場所を変わるたび、蚕のにおいもだんだんときつくなっていった。その時、私はもう次の場所には行けないと思い、本当に行けなかった。みんなが帰ってくるまで外にいた。

それからそれぞれ班に分かれて、働いている人の話を聞くことになった。私の班は宮坂さんだった。何か話を聞いていたら、つい涙がいっぱいこもってた。それは宮坂さんの話している内容が、私を感動や悲しみの渦に巻き込んでいったのだ。これは宮坂

さんが説明したからだと思う。宮坂さんのあの優しい気持ち。そして、あせらずマイペースで、しっかりと自分をもっていたと思った。だけど、つらいことはあまりないって言った宮坂さんには、働く人がいるからだと思った。『みんなが楽しく元気で仕事をしていたら、私にとってとってもうれしいことだ』って言っていた宮坂さん。とっても心のあったかい人だと思った。製糸工業なんてめったにないし、かなりのいきおいでピンチをまねいてると思ったけど、それは本人もわかっていたけど、弱音を吐くわけでもなく、さすがこの仕事をやるだけの人だと思った。インタビューしているときも、ニコニコ笑ってくれて、逆に私には、それがとってもつらかった。でも、ただ、本当にカンパツてほしいし、ま

けないでほしい。宮坂さんのことだから、まけないと思うし、働いてる人もみんなで助け合って製糸工場を続けてほしい。なんか自分もこのとき、とってもあったかい気持ちになれた。だから「くさい」とか言ってしまったこと本当に悪いと思ってます。私にとって、研究旅行の中で一番思い出になったと思います。先生、宮坂さん、よい体験をありがとうございました。

こうして研究旅行は終わっていった。今も心に残っている旅行、本当によかった。久しぶりに感動、そして楽しいこといっぱい、いっぱい、一気にあった。そしてハードだった研究旅行だったけど、全部が良い体験になれた、と思えて嬉しかった。」

このTさんはうまく進級できなかった生徒です。

特集 現在、 子ども・青年を考える

17才の風景から

川崎サークル 乙 津 徳 子

バスジャック、殺人…等、少年のひきおこした凶悪な事件が続いた。「17才問題」とニュースは騒ぎ、17才という年齢が何か特別なものででもあるかのように、取沙汰した。いつの間にか17才という年頃を通り過ぎてしまっていた私たち「大人」は、17才の頃いったい何をしていたんだろう。「思春期」と呼ばれていたあの頃は、確かに、気持ちの揺れの多い時期ではあったと思う。そ

頃の自分を振り返ってみる。やたらに物事を突き詰めて考え、周囲をヒヤリとさせていたのかもしれない私がそこに居た。こんな事があった。高校生の私は、たまたま通りかかった職員室近くの中庭で、室内サンダルのまま、庭を突っ切り、向かいの校舎まで行こうとする校長先生の姿を目撃してしまったのだ。「先生、校則違反です！」そんな意味の言葉を書いて、私はどうやら、